

# 「スールー王国軍」兵士侵入事件

山本博之

## はじめに

アメリカのSFテレビドラマシリーズで映画も制作されている『スター・トレック』にカトーという日系人が登場する。ただし、これは演じた役者が日系人だったこともあつて日本語吹き替え版につけられた日本版オリジナルの役名であり、実際の役名はヒカル・スールーという。ヒカルは光源氏、スールーはスールー海に由来する。スールー海から名前を取った理由は、後づけと思われるものを含めていくつか知られており、その一つに、この役にアジア系でありながら特定の国籍をイメージさせたくなかった制作者が、アジアの海のうち複数の国に接しているスールー海

を見出したというものがある。

スールー海はフィリピンの南西部に位置する。ミンダナオ島とボルネオ島（カリマンタン島）の間にあり、そこには南南西から東北東にかけて約三〇〇キロに及ぶスールー諸島が存在する。スールー諸島には一五世紀から一九世紀にかけてスールー王国が繁栄し、植民地化と独立によりフィリピン領に組み入れられて現在にいたっている。

この海域は、フィリピンの中央政府からもマレーシアの連邦政府からも辺境として長く関心の埒外に置かれてきたが、二〇一三年に入って両国政府および国際社会の注目が集まっている。二〇一三年三月一日、マレーシア・サバ州の東海岸ラハダトゥで「スールー王国軍」を名乗るフィリピン人武装集団とマレーシアの治安部隊の間で銃撃戦が生じ、双方あわせて一四人の死者が出る事件が発生した。そ

の翌日には、サバ州の別の村で地元警察と武装集団の銃撃戦が生じ、双方あわせて少なくとも一三人が死亡した。三月五日には、マレーシアの警察と国軍の合同による「スルー王国軍」の大規模な殲滅作戦が展開された。

意見の違いを暴力の行使に頼らず解決する文化を作り上げてきたマレーシアで、多数の死傷者が出る銃撃戦や大規模な軍事作戦の展開が続いたことは大きな衝撃をもって受け止められた。この事件をどのように理解すればよいのか。また、「サバ領有権問題」「旧スルー王国のスルトンの末裔」「イスラム武装集団」などの言葉で語られているこの出来事をどのように把握すればよいのか。

本稿では、二〇一三年三月に発生した「スルー王国軍」兵士のマレーシア・サバ州東海岸への侵入事件を取り上げ、上記の問題について考えてみたい。なお、この事件は、治安上の理由から情報が制限されているために全体像を掴みにくい。本稿では、主にマレーシアの一般報道情報をもとに、サバ州の政府関係者への聞き取り調査等によって可能な限り補いながら、事件の経緯および意味を検討する。

## I サバ州ラハダトゥの位置

サバ州は、連邦国家マレーシアを構成する一三州の一つ

で、首都クアラルンプールが位置する半島部マレーシアではなく、そこから南シナ海を挟んだボルネオ島に位置する。サバ州の本島面積は約七・四万平方キロで、北海道（本島面積約七・八万平方キロ）とほぼ同じ大きさである。<sup>\*1</sup>地理的關係をイメージするために北海道の例を使うならば、サバ州の州都コタキナバルはクアラルンプールと約一六〇〇キロ離れており、これはおおよそ札幌と石垣島の距離にあたる（図1参照）。

事件の主な舞台は、サバ州東海岸のラハダトゥ郡にあるタンドウオ村という小さな村だった。コタキナバルからラハダトゥ郡の中心地ラハダトゥ町まで約二七〇キロあり、そこからタンドウオ村までさらに約一三〇キロある。再び北海道を例にとると、札幌から根室までが約三四〇キロなので、コタキナバルからタンドウオ村まではそれよりも遠いことになる。

サバ州東海岸は、熱帯雨林が広がる土地に、沿岸部や川沿い、そして内陸部の盆地に人々がまばらに住んでいる土地である。最近は大規模開発によるアブラヤシ農園も作られており、その周囲に村が点在している。タンドウオ村も、アブラヤシ農園が広がる土地の、海辺の小さな村である。タンドウオ村はコタキナバルからもラハダトゥ村からも遠く離れているが、目の前に広がる海のすぐ向こうにはフィリピン領のスルー諸島がある。

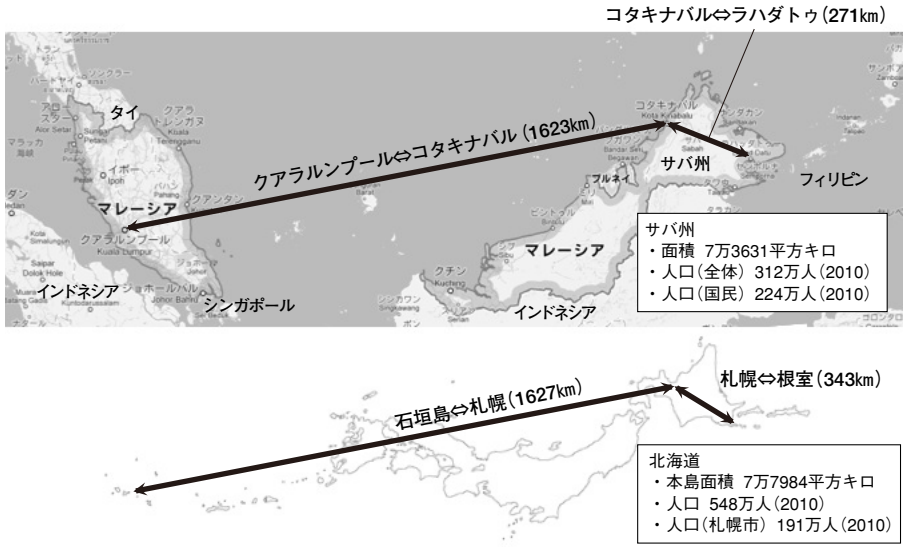


図1 サバ州とラハダトゥの位置

## II 事件の経緯

二〇一三年二月二日頃、「スルー王国軍」を名乗るフィリピンの武装集団がラハダトゥの海岸に侵入してタンドゥオ村を占拠した。侵入者の人数は報道によって約一〇〇人から約四〇〇人まで幅があり、その全員がスルー諸島から来たのか、それとも一部はサバ在住者でスルー諸島から来た人々と合流したのかなどははっきりしない。

「スルー王国のスルタン」を名乗り、「スルー王国軍」を派遣したとされるジャマルル・キラム三世は、派遣人数を二二五人と言ったと報じられた<sup>※\*</sup>。

「スルー王国軍」がタンドゥオ村を占拠すると、マレーシアの治安部隊はタンドゥオ村を包囲し、投降を呼びかけるビラを撒いたりして平和的な解決を試みていた。しかし三月一日、タンドゥオ村で治安当局と武装集団の間で銃撃戦が生じ、マレーシアの治安当局の隊員二人と「スルー王国軍」側のメンバー二人が死亡した<sup>※\*</sup>。

このときマレーシア側で犠牲になったのは、マレーシア警察の対テロ対策特殊部隊であるVAT69部隊(Very Able Trooper-69)に所属する二人の隊員だった。VAT69部隊は、イギリス陸軍の特殊空挺部隊(SAS)に倣っ



図2 「スルルー王国軍兵士」侵入事件の経緯

て、共産主義ゲリラ対策のため一九六九年に作られた。一九七五年の日本赤軍事件を機に設立されたUTK部隊 (Unit Tindak Khas) とともにマレーシア警察のテロ対策の特別部隊のもとに置かれ、UTK部隊は潜入捜査、VAT69部隊はジャングルでの作戦を中心とし、半島部マレーシアではスランゴール州以南をUTK部隊、それより北をVAT69部隊が管轄している。二人の隊員は、この事件の対応のため半島部マレーシアからサバ州に派遣され、職務遂行中に命を失った。スランゴール州出身の四六歳の隊員とトレンガヌ州出身の二九歳の隊員で、とくにトレンガヌ州出身の隊員の家庭では二歳と一歳の男の子二人を抱えた妻が残され、マレーシアで大きく報じられて国民的な同情を買った。

この事件と関連して、ラハダトゥ以外の場所でも銃撃戦などの事件がいくつか報じられた(図2参照)。三月二日、センボルナで治安当局と武装集団の間で銃撃戦が発生し、警官六人、武装集団メンバー七人が死亡した。前日の銃撃戦から逃れた「スルルー王国軍」兵士が村に潜入したという通報を受けて地元の警察が捜査に赴いたところ、発砲されて銃撃戦になったという。犠牲になった警官はほとんどがサバ州出身者だった。警察は、はじめこの事件はタンドウオ村の「スルルー王国軍」と無関係だと言っていたが、後にこれも「スルルー王国軍」の関係者に含まれ

た。また、同じ日に、地元警察は、サバ州東海岸のクナックで武装した三人を含む「スールー王国軍」兵士一〇人を逮捕した。

さらに三月三日には、センボルナの別の村で、住民が「スールー王国軍」兵士を撲殺するというショッキングな事件が発生した。住民らの話をまとめた警察によると、銃を持った一人の男が村にやってきて、住民たちを銃で脅して村の広場に集め、この村を自分の支配下に置こうとしたが、男がタバコを吸おうと銃を置いた瞬間に若者たちが飛びかかり、もみ合っているうちに誤って殺してしまったという。警察は、このような実力行使は本来なら許されないが、男が「スールー王国軍」兵士を名乗ったという特殊な事情があるために情状酌量の余地があると述べた。殺された男の身許は明らかにされなかったが、遺品から「モロ民族解放戦線」(M.N.L.F.)の身分証が出てきたため、「スールー王国軍」の関係者だとされた。

「スールー王国軍」の目撃情報はこれらのほかにもサバ州各地で警察に寄せられた。たとえば東海岸のタワウでは「スールー王国軍」による車上荒らしの被害が通報され、警察が調査したところ、車上荒らしの被害は確かにあったが、犯人は「スールー王国軍」とは無関係の人物だったという。このほかにも「スールー王国軍」の目撃情報が何件も寄せられ、それぞれ警察が捜査に当たった。目撃情報や

噂は東海岸から遠く離れた州都コタキナバルにも及び、「スールー王国軍」兵士が近隣の村から州都に向かっていくという情報も飛び交ったが、その実体はなく、警察は「噂を信じないように」と呼びかけた。

「スールー王国軍」兵士がサバ州各地に出没しているという情報もたらされるなか、マレーシア政府はサバ州東海岸に治安部隊を増派し、三月五日に警察と陸海空三軍の共同作戦による大規模な包囲殲滅作戦を開始した。「スールー王国軍」兵士が占拠するタンドウオ村と近隣のタンジュンバトゥ村を対象に、戦闘機による空爆および陸上と海上から包囲した攻撃を加え、治安当局は三月七日までにほぼ全域を制圧したと発表した。「スールー王国軍」側は少なくとも五一人が死亡し、先に銃撃戦で死亡した警察の八人と民間人一人を加え、この一連の出来事で少なくとも六〇人が死亡したことになる。

三月七日、マレーシア政府はサバ州東海岸の五つの郡を特別保安地域に指定して、軍と警察を追加配備した。さらに、「スールー王国軍」兵士が住民に紛れて逃亡しているとして、警察が追跡捜査を続けている。

### Ⅲ スーロー王国とサバ領有権問題

この事件の首謀者とされるスーロー王国のスルタンとは何者で、サバ領有権の主張とはどのような内容なのか。

#### 1 スーロー王国とサバ領有権<sup>\*4</sup>

ボルネオ島北部に位置するサバが一つの行政単位となるのは、一八八一年、イギリスの北ボルネオ会社によつてこの土地が統治されたことによる。<sup>\*5</sup>

一八八一年より前、サバはブルネイとスーローの二人のスルタンによる二重の統治領だった。ただし、サバ全域に二人のスルタンの支配が及んでいたわけではない。当時、この地域の支配は川ごとに行われていた。熱帯雨林には野生動物や病気が多く、人々は沿岸部や川沿いに住んでいた。内陸部では川が主な交通路だったため、河口を押さえおけば人の動きも物流も押さえることができると。川ごとの支配と言っても、実際には影響力はせいぜい河口や周囲の沿岸部にしか及んでいなかった。

川ごとに支配者がおり、それを名目上支配しているのがスルタンだった。その意味で、サバはスルタンの統治下に

あったものの、スルタンが直接統治しているわけでも、スルタンの統治が北海道とほぼ同じ広がりを持つサバ全域に及んでいるわけでもなかった。また、川ごとの支配者とスルタンの間では、必ずしもスルタンの力が強いわけではなかった。また、ある川に対する名目上の支配権をスルタンが別の人物や会社に売ったり譲ったりすることもあった。

一八八一年にイギリス北ボルネオ会社が設立されたのは、駐香港オーストリア領事のオフエルベクとイギリス商人のデント兄弟が転売目的でボルネオ島北部の権利を買い集めたものの、買い手が見つからなかったために北ボルネオ会社を設立して経済開発を試みたという経緯がある。

オフエルベクらは一八七八年にサバ西海岸のいくつかの川の支配権をブルネイのスルタンから手に入れたが、名目上の支配者がスルタンからイギリス人に変わっても住民がイギリス人に従うとは限らない。銃などの武器の力を借りて言うことを聞かせようとしても、北ボルネオ会社が支配権を持たない隣の川の流域に逃げられればそれ以上追うことはできない。そのため、北ボルネオ会社は約二〇年かけてブルネイのスルタンから川を一本一本買い、現在のサバ州の領域を北ボルネオ会社の統治領域として整えていった。<sup>\*6</sup>

他方、オフエルベクらはスーローのスルタンから一八七八年にサバを一括して買い取った。このとき契約書に書か



れていたのは「パジャック」(patjak)という言葉だった。これをオフェルベクらは「割譲」と解釈したのに対し、スールーのスルタンは「租借」と解釈し、これがフィリピンのサバ領有権問題の起源となった。北ボルネオ会社は「パジャック」の対価としてスールーのスルタンに毎年五〇〇〇海峽ドルを払う契約を結んだが、これについても、北ボルネオ会社は購入代金の分割払いであると解釈したのに対し、スールーのスルタンは借料を毎年受け取っていると解釈し、両者の解釈は食い違っていた。<sup>＊7</sup>

一九五〇年代に入つてサバがイギリスからの独立を構想するようになり、サバは単独で独立するのか、近隣のサラワクやブルネイと一緒にボルネオ連合として独立するのか、それとも同じイギリス領だったマラヤ連邦と合併して独立するのが検討され始めた。<sup>＊8</sup> それらの案の一つとして、一九五七年にイギリスから独立したマラヤ連邦とともにマレーシアという新連邦を作ることが提案されると、インドネシアとフィリピンはこの構想に反対した。

スールー王国は、フィリピン諸島の植民地支配者がスペインからアメリカになったときにフィリピンの一部に組み込まれ、フィリピン政府はスールー王国の存在を公式に認めなくなっていた。しかし、フィリピン政府はマレーシア構想に反対する過程で、サバはスールー王国のスルタンの領土であり、スールー王国はフィリピンの一部であり、し

たがってサバはフィリピンの領土であると主張した。これがフィリピン政府によるサバ領有権の主張となった。

フィリピンによるサバ領有権の主張について詳細に論じることが本稿の目的から外れるのでこれ以上立ち入らないが、土地の所有権を誰が持っているかということ、その土地の主権が誰に属すかは別であることは確認しておきたい。所有権に関しては、一八七八年の「パジャック」が割譲なのか租借なのか問題となり、北ボルネオ会社がスールーのスルタンに毎年払ったのが購入代金の分割払いなのか毎年の賃借料なのかという問題と関連して議論されている。ただし、仮に「パジャック」が租借であり、スールー王国のスルタンに毎年払われていたのが賃借料だったと解釈しても、そのこととサバの主権は切り離して考えるべきだろう。一九六一年にマレーシア構想が提案され、その二年後にマレーシアが結成されるまでの間、サバの独立のあり方に関する住民の意向調査が二回行われた。一回目は一九六二年のコボルド調査団による調査で、サバの住民はマレーシア結成におおむね賛成という結論を得た。ただし、この調査団はイギリスとマラヤ連邦が指名したために中立性を欠くという批判も可能だろう。そのため、イギリスとマラヤ連邦は当初予定されていた独立とマレーシア結成の日程を延期して、一九六三年に国連が改めて住民の意向調査を行った。その結果は、サバの住民はマレーシア結成に

賛成というものだった。これを受けて一九六三年にマレーシアが結成され、サバはマレーシアの一州となった。名目上の支配者であるスルタンの意向ではなくサバの住民の意向に従うならば、サバの帰属はマレーシアということになる。

## 2 スールー王国とミンダナオ紛争

今回の事件の首謀者とされるスールー王国のスルタンとはどのような人物なのか。まず確認しておくべきことは、「スールー王国のスルタン」を名乗る人物は一人ではなく、比較的よく知られている人物だけでも数人いるし、実際にはさらに多くの人々がいることである(図3参照)。

スールー王国は一五世紀から続いているが、サバをオフェルベクらに「バジャック」したのは第二九代スルタンのジャマルル・アラム(統治一八六二—一八八二)だった。第三〇代スルタンはその息子バダルッディン二世(一八八一—一八八四)、第三一代スルタンはその弟ジャマルル・キラム二世(一八八四—一九三六)で、第三二代スルタンにはその弟のムワリル・ワシト二世が就くことになっていたが、即位直前に亡くなった。この後しばらく、複数の家系から立てられた複数のスルタンが競合する。第二次世界大戦の時期と重なったこともあり、日本軍が認めるス

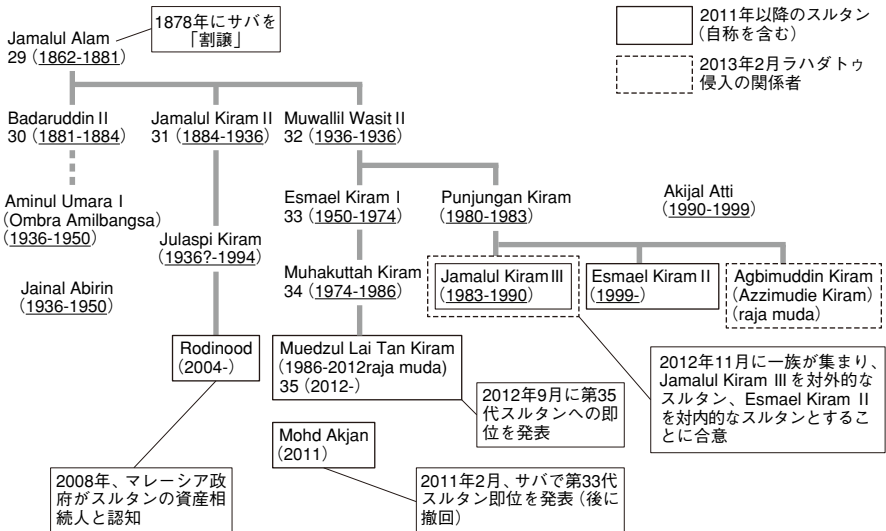


図3 スールー王国のスルタン



ルタン、アメリカ側につくスルタン、サバのスルツク人と繋がるスルタンなど、外部世界のそれぞれ異なる勢力と結びついてスルタンを名乗る人物が複数現れた。

第二次世界大戦後の一九五〇年にはイスマイル・キラム一世（一九五〇―一九七四）が第三代スルタンとなったが、その死後、その弟のブンジュンガン・キラムと息子のムハクッタ・キラムがそれぞれスルタンを名乗り、この二つの家系で別々にスルタン位が継がれていった。

ブンジュンガン・キラム（一九八〇―一九八三）の家系では、息子のジャマルル・キラム三世（一九八三―一九九〇）などを経て、その弟のイスマエル・キラム二世が一九九九年よりスルタンとなって現在に至る。

他方、ムハクッタ・キラム（一九七四―一九八六）の家系では、第三四代スルタンのムハクッタ・キラムが一九八六年に亡くなると、その息子のムズル・ライ・タン・キラムがラジャムダに即位した。<sup>9</sup>

二〇一二年九月、ムズル・ライ・タン・キラムが第三五代スルタンに即位したと発表されると、これを受ける形で、同年一月にイスマエル・キラム二世の家族が集まり、イスマエル・キラム二世が引き続きスルタンであること、ただしその兄で元スルタンであるマニラ在住のジャマルル・キラム三世が対外的なスルタンを務めることが確認された。このジャマルル・キラム三世が、今回「スーロー

王国軍」兵士をサバ州に派遣した「スーロー王国のスルタン」である。<sup>10</sup> また、その弟のアジムッディン・キラムは、ラジャムダとして武装集団を率いてサバ州に侵入したとされている。<sup>11</sup>

上であげた自称スルタンたちはいずれもフィリピンで生まれ育っているが、サバ州で生まれ育った自称スルタンもいた。二〇一一年二月、モハマド・アクジャンという人物がスーローの第三三代スルタンに即位したと発表し、マレーシア政府にとって重大問題となった。マレーシアでは、イギリスの直轄植民地だったサバ州などの四つの州を除く各州にスルタンがいる。<sup>12</sup> スルタンは世襲で、各州のイスラム教の擁護者であり、マレーシアの国王はスルタンの互選で選ばれる。マレーシア国外でスーローのスルタンを名乗る人物が複数いてもマレーシアとしてはとくに問題ないが、マレーシア国民がマレーシア国内でスルタンを名乗ることは国体への重大な挑戦であり、マレーシア政府としては看過できないことだった。そのためマレーシア政府はモハマド・アクジャンを逮捕し、モハマド・アクジャンは後にスルタン即位を否定した。

自称「スーローのスルタン」はこれらの他にも複数いる。たとえば、ジャマルル・キラム二世の孫のロディノドもスルタンを名乗っており、マレーシア政府はロディノドをサバの購入費を毎年支払うスルタンの資産継承人と認め

ている。また、マレーシア政府はスールーのスルトンの資産継承者に割譲費の分割払いとして毎年五三〇〇リングを支払っているが、一説によるとその金額は九人の自称スルトンで分け合っているという。

「スールー王国のスルトンの末裔」と聞くと、その人物が旧スールー王国を一人で引き継ぐ立場にあると誤解しかねないが、そのようなことはない。

また、もう一つ重要なことは、これらの自称スルトンは、家柄はとても高貴だが、いずれも今日のフィリピン社会において政治的にも経済的にも周縁部に置かれており、社会における影響力はほとんどないということである。

ミンダナオ紛争の中心的な位置を占めてきたのはモロ・イスラム解放戦線(MILF)で、二〇一二年一〇月にフィリピン政府とMILFの間で和平の枠組み合意が結ばれ、二〇一六年の自治政府組織に向けて交渉が進められている。交渉のための会議は、マレーシアがホストとなり、クアラルンプールで二〇一三年二月末に行われることになっていった。しかし、この和平合意にも自治政府組織のための交渉にも、「スールーのスルトン」たちは関わっていない。

二〇一二年九月頃に「スールーのスルトン」を名乗る人物が増えたことは、フィリピン政府とMILFの和平過程が進むのに対して、そこに「スールーのスルトン」たちが

参加できないことに苛立ちや危機感を抱き、ミンダナオの将来を考える上で自分たちも当事者として加わりたいというアピールの意味があったことを物語っている。かつてフィリピンの上院議員を務めたことがあるジャマルル・キラム三世が対外的なスルトンとされたのも、フィリピン政府に対する交渉力を期待したためとも考えられる。<sup>\*13</sup>

しかし、予期せぬいくつかの状況の積み重ねと、今回の状況を利用してしようとする人々の思惑が重なって、事態は想像を超えて不幸な方向に大きく展開してしまった。その原因として、そもそも「スールー王国軍」兵士が武装してサバに侵入したことに加え、「スールー王国軍」や「スールー王国」の故地への帰還」という語り方がなされたことが、事態を不幸な方向に進める口実を与えたようにも思われる。

事件の当初、フィリピン政府は「スールー王国軍」兵士らに帰国を呼びかけ、これに対して「スールー王国軍」兵士側は自分たちの土地に滞在しているだけで何の法も犯していないと応答した。この前半部分が「スールー王国の故地への帰還」と語られたため、世間はこの問題に領土問題としての関心を向けるようになった。また、フィリピンでは militia と呼ばれる民兵が珍しくないが、今回の事件ではそれがメディアなどで army と呼ばれ、さらに「スールー王国」と結びついて「スールー王国軍」と語られたこ

とも、マレーシア政府が最終的に大規模な軍事作戦を展開して大きな犠牲を生むことになった遠因の一つとなったように思われる。

## IV サバ州の外国人問題と

### マレーシアの総選挙

マレーシア側からこの出来事を見たとき、不思議なのは、どうしてマレーシア政府はこれほどの大規模な軍事作戦を取らなければならなかったかということである。その背景の一つに、二〇一三年四月までに行われると見られていた総選挙で与党連合が厳しい戦いを強いられそうである。勝利の鍵を握るのがサバ州住民の支持であるという連邦政府・与党連合の事情と、一九六三年のイギリスからの独立以来、出身地を問わずに多様な人々から成る混成社会を作ろうとしてきたサバ州で、一九八〇年代以降に外国人人口の流入によって人口バランスが大きく変化しており、それへの対応を求めてきた（しかし連邦政府は十分な対応をとろうとしてこなかった）というサバ州の事情がある。

#### 1 マレーシア連邦政府の事情

マレーシアでは、五年に一度の総選挙で連邦政府を担う政党（連合）が選ばれる。一九五七年の独立から今日まで五〇年以上にわたり、連立与党の中核であるUMNOが首相を出し続けている。「独立の父」アブドゥル・ラーマン（Abdul Rahman）首相も、長期政権のマハティール・モハマド（Mahathir Mohamed）首相も、現在のナジブ・ラザク（Najib Razak）首相も、いずれもUMNOの党首としてマレーシアの首相を務めてきた。

ただし、UMNOは単独で政権を担ってきたのではなく、他の政党と連立して与党連合を組織し、その中心にUMNOがおさまることで政権を担当してきた。与党連合が五〇年以上も政権を担当し続けてきた秘訣は、政策に不満を持つグループが政党を結成して勢力を伸ばすと、それを与党連合に取り込み、与党連合内で資源の配分を調整してきたことにある。現在の与党連合は国民戦線（BN）で、UMNOのように主に半島部を基盤とする政党だけでなく、サバ州やサラワク州を基盤とする政党も取り込み、安定した政権を運営してきた。

しかし、マハティール首相の後継者と目されていたアヌアル・イブラヒム（Anwar Ibrahim）がマハティールとの

路線対立によって一九九八年にUMNOを除名されたことを契機に、アヌアルを指導者とする人民公正党（PKR）が結成されると、国民戦線の統治に不満を抱く政党や社会勢力がPKRと連携して、野党連合・人民協約（PR）に発展した。<sup>14</sup>人民協約は基本的に半島部で国民戦線に不満を持つ勢力が集まったもので、結成当初、サバ州とサラワク州では人民協約に直接合流する動きはなかった。

二〇〇八年の総選挙では人民協約が大躍進し、国民戦線は国会の過半数の議席は維持したものの、国会の議席は三分の二を割り込み、「大敗」した。国会の二二二議席は与党連合が一四〇議席、野党連合が八二議席となった。半島部、サバ州、サラワク州ではそれぞれ異なる政党が活動しているため、二〇〇八年の総選挙の結果を半島部、サバ州、サラワク州に分けると、国会の与野党の議席数は、

半島部 八五対八〇

サラワク州 三〇対一

サバ州 二五対一

となる。半島部では与党連合が五議席差でかろうじて勝ったが、わずかに三議席移っただけで与野党が逆転する僅差だった。サバ州とサラワク州では与党連合の圧勝に見えるが、サバ州とサラワク州の政党は半島部の与党連合とは直接の繋がりが無い地元政党がほとんどで、もし半島部で人民協約が過半数になるなら人民協約に合流してもよいと考

えている政党も少なくなり、くら替えの敷居はとても低い。

国会議員の任期は五年間で、二〇一三年四月二七日が任期満了だった。任期満了までにタイミンクを見計らって首相が解散・総選挙を行うのがマレーシア政治の慣行だが、このときは与党連合の準備が進まず、解散・総選挙は遅れていた。その背景の一つとして、半島部の国民戦線と人民協約の対立は根深いものがあり、ほぼ互角という状況は大きく変わりそうにないため、選挙で勝つにはサバ州とサラワク州の支持を固めなければならず、そのためサバ州とサラワク州にとって深刻な課題に答えなければならぬという事情があった。こうして、二〇一三年の総選挙を直前にして、連邦政府はこれまでサバ州が三〇年近く要求してきた課題である国境警備と外国人移民問題に対応せざるをえなくなった。

## 2 サバ州の内政の課題

——安全保障と経済開発に挟まれた外国人問題

一九六三年九月、サバはイギリスから独立してマレーシアの一州になった。このとき、マレーシアという枠組みでの独立を選んだ大きな理由は安全保障だった。当時、北からは中国からベトナムへと共産主義化の動きがあり、南か

らはニューギニア島の一部を併合したインドネシアの拡張主義があり、サバは単独で独立すればいずれ共産主義勢力がインドネシアのどちらかに呑みこまれてしまうという恐れがあった。マレーシア結成に参加すれば二つの拡張主義から逃れられるというのが、サバの指導者たちがマレーシア参加に踏み切った大きな理由だった。

独立してマレーシアの一州となり、国防と治安の問題で頭を悩ませることがなくなったサバ州は、州内の経済発展に乗り出した。一九六三年には、マラヤ連邦に倣ってサバ州の主要三民族を代表する三つの政党が与党連合を組織し、州政府を担当した。州首相はドナルド・ステファン(Donald Stephens)で、ニュージールランド人とカダザンドゥスン人の混血者である父親と、イギリス人とおそらく日本人の混血者である母親を持ち、半分白人の外貌を持ったキリスト教徒だった。ステファンは、州内の木材資源を利用した経済開発を構想し、木材生産業を州有化しようとしたが、木材業者たちの反発を受けて失脚した。

一九六七年の選挙で第一党になった統一サバ国民機構(USNO)の総裁として州首相になったムスタファ・ハルン(Mustapha Harun)は、スルック人のイスラム教徒で、スルー王国のスルタンの親類だった。ムスタファはサバと半島部が文化的に対等になる必要があると考え、教育言語を英語からマレー語に切り替えたり、内陸部の先住

諸族をイスラム教に改宗させたりする「マレー化」による「文明化」を進めた。サバ州沖で採れる石油ロイヤリティの州の取り分を五%とするという連邦政府の提案に反対してサバをマレーシアから離脱させる可能性を示唆したり、木材生産業を公営化してそこから得られた資金をもとにミナダナオのMNLIFを公然と支援したりしたため、連邦政府の頭を悩ませ、一九七六年の選挙で連邦政府の支援を受けたブルジャヤ党に敗北した。

一九七六年に州政権についたブルジャヤ党(Berjaya)は、インド・パキスタン系とマレー人の混血者と言われるイスラム教徒のハリス・サレー(Harris Sali)総裁が州首相を務め、連邦政府のマハティール首相の支援のもと、フィリピンやインドネシアから外国人労働者を積極的に受け入れてサバ州の経済開発を進めた。フィリピンやインドネシアから労働者を入れただけでなく、国民登録局の担当官に指示して本来なら与えられないはずのマレーシア国民の身分証明書を発給したため、多くの外国人がマレーシア国民の身分証明書を持つことになった。この身分証明書は不正な手続きで得られたものだが、手続き自体は正規のものであるため、身分証明書も正規のものとなる。こうしてマレーシア国民の身分を手に入れた人々の多くは「マレー人」を名乗るようになり、身分証明書が手に入らなかった人々は「外国人」としてサバ州に滞在することになった。

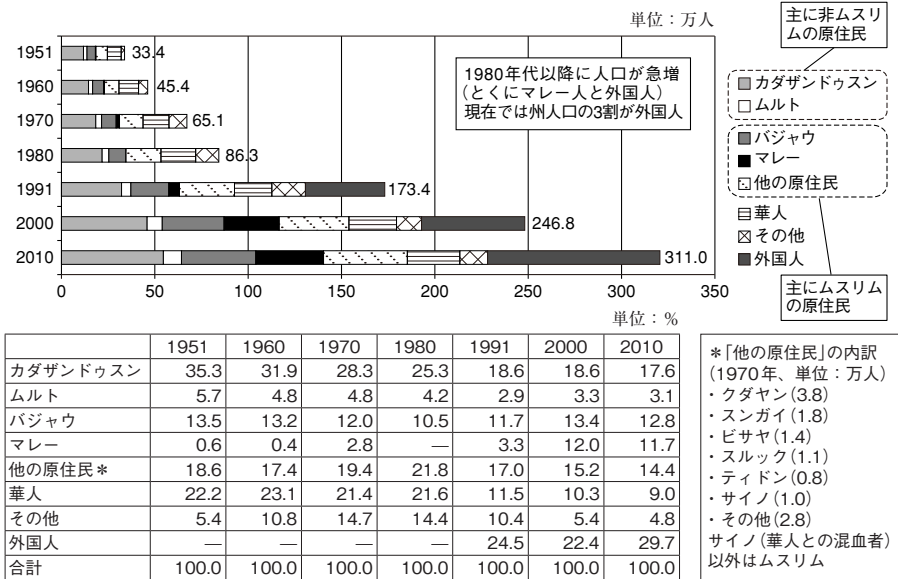


図4 サバ州の人口構成と民族

このためサバ州では一九八〇年代以降に人口が急増し、とくに「マレー人」と「外国人」が大きく増えている（図4参照）。

フィリピンやインドネシアからの移民人口が急激に増え、しかもその多くがマレーシア国民の身分を手に入れ、有権者の人口構成が大きく変化していることに対して、主に内陸部に住む非ムスリムの先住諸族（カダザンドゥスン人やムルト人）や主に町に住む華人の間で危機感が高まり、一九八五年の選挙ではこれらの人々の支持を受けたサバ団結党（PBS）が政権に就いた。党首のバイリン・キティガン（Patin Kitingan）はカダザンドゥスン人のキリスト教徒で、「サバ人のサバ」を掲げて州自治を求め、連邦政府に対してサバ州の経済開発や国境警備、外国人急増問題の解決を要求した。バイリンの弟であるジェフリー・キティガン（Jeffrey Kitingan）は、サバ州の先住諸族出身者で初のハーバード大学の博士号取得者で、大学で学んだことをサバ州の現実に照らして実現するために柔軟にアイデアを出し、自らの信念にしたがって行動する人物として知られる。<sup>17</sup> 外国人問題の調査・解決や石油ロイヤルティの見直しなどを連邦政府に要求し、連邦政府がこの要求に応えないとサバのマレーシアからの離脱の可能性を検討するにいたり、国内治安法で逮捕・勾留されたこともある。バイリン州首相のもと、PBS政権は連邦政府に対して厳



しい態度で臨んだが、これによってP B S政権と連邦政府の対立は激しくなり、連邦政府の中核であるU M N Oが一九九一年にサバ州に進出してサバ州の直接統治に乗り出した。

一九九四年の選挙では、U M N Oが中心となって国民戦線のサバ州支部を組織し、州政権をP B Sから奪った。半島部の国民戦線に倣って民族別政党が連立する方式を取り、州首相のポストは、ムスリム（マレー人やバジャウ人など）、先住諸族（カタザンドゥスン人など）、華人の主要三民族の輪番制とした。州首相輪番制がとられた九年間は、国民戦線を与党、P B Sを野党とし、親連邦路線がサバ州独自路線かの選択が迫られた時期だった。しかし、この間も州内のマレー人（イスラム教徒）の数は増え続け、有権者の半数以上がイスラム教徒となったため、二〇〇三年には州首相の輪番制を廃止し、州首相は常にU M N Oから出すことになった。

P B Sは二〇〇三年に国民戦線に加わり、オール与党体制となった国民戦線政権のもと、サバ州では連邦政府の資金をもとに東海岸のアブラヤシ農園の大規模開発などが進められ、その労働力の供給源となる外国人の急増問題は放置された。「開発できるところから開発する」という方針により、内陸部の経済開発、東海岸の国境地帯の国境警備・治安維持、さらにフィリピンやインドネシアからの移

住者が身分証明書を持っていないためにサバ社会にうまく位置付けられず、その子どもたちが無国籍児童となって十分な教育や医療が受けられないことなどの問題は置き去りにされたままとなった。

二〇〇八年以降、半島部で野党連合・人民協約が勢力を伸ばす状況で、野党連合との連携によってこれらの問題の解決の可能性を求めたのが、東海岸ラハダトゥ出身の華人で州首相経験者でもあるヨン・テックリー（Yong Teck Lee）と、内陸部出身のカタザンドゥスン人であるジェフリー・キティガンの二人だった。

### 3 サバ州の外国人問題

サバには単一の「サバ民族」がなく、さまざまな民族がサバ州住民を構成している。前項で一部を紹介した歴代の州首相を見ても、マレー人ムスリムだけでなく、白人とアジア人の混血者（ステファン）、スルック人（ムスタファ）、インド・パキスタン系の混血者（ハリス）、先住諸族のカタザンドゥスン人のキリスト教徒（バイリン）、華人（ヨン・テックリー）などさまざまな民族があり、しかもその多くは混血者である。民族性、宗教、出身地が違っていても、正規の手続きを経て社会の一員となれば誰でも受け入れて一緒に社会を作ったのがサバ社会の特徴であると



言える。

さまざまな文化背景を持つ人々が一つの社会を作る上でサバで形作られてきた工夫として、民族ごとに長を決め、民族内の争いはその長が裁定し、民族を越えた争いは長どうしが協議して裁定する仕組みがある。これを外国人に適用する仕組みが、大使館・領事館とパスポートである。相手が何者であるかを示す公的な文書（パスポート）を持ち、何かトラブルがあったときに誰が長なのか（大使館・領事館）を明示するという仕組みである。<sup>\*18</sup>

サバ州における外国人問題の解決といったとき、主要な問題は、(1)一九八〇年代以降にサバ州の人口が急激に増加し、しかもマレーシア国民が急増しているのはなぜかを調査すること、(2)フィリピンやインドネシアの政府に働きかけて、サバ州にそれぞれの領事館を置いてもらうとともに、サバに入境する外国人は一人一人がパスポートを所持するようにすることの二点である。

(1)に関しては、調査委員会を組織してほしいというサバ州の要求をずっと無視してきた連邦政府は、総選挙でサバ州の有権者の支持を得なければならぬ状況で重い腰を上げ、二〇一二年六月に外国人問題の王立調査委員会(RCI)を設置した。調査委員会のヒアリングが進められるにつれて、調査内容の一部が新聞などで報じられ、外国人への身分証明書発給がマレーシアの政府高官を含めて

行われていたことなどが明らかにされつつある。(2)に関して、フィリピン政府がサバ領有権の主張を取り下げていないためにサバに領事館を置いておらず、このことが結果的にサバ州におけるフィリピン人の立場を悪くしている。<sup>\*19</sup>

## V 銃撃戦と軍事作戦

二〇一三年三月五日、マレーシアの治安当局は大規模な軍事作戦を展開して「スルー王国軍」の殲滅に乗り出した。サバに侵入した「スルー王国軍」兵士はせいぜい四百人であり、二月半ばにサバ州に上陸して以来、マレーシア警察に包囲されて食料も不足していたという。警察と陸海空の三軍の合同で二万人を動員するほどの大規模な作戦を展開して対応する必要があったのかという疑問が生じる。

しかし、その妥当性はともかく、マレーシア政府は大規模な軍事作戦を展開し、このことはマレーシアの領土を脅かそうとする外国勢力への抑止の意味に加え、マレーシア国民(とくにサバ州の有権者)に対して、連邦政府が強い態度で国民の安全を守ろうとしているというアピールになった。

「スーロー王国軍」が立てこもったのはタンドウオ村で、三月五日の軍事作戦の対象となったのはタンドウオ村および隣接するタンジュンバトゥ村だった。三月二日から三日にかけて生じた警察と武装集団の銃撃戦などの事件では、当初、警察は「スーロー王国軍」との関係を否定していたが、後にこれらの事件も「スーロー王国軍」関係者が起こしたと言うようになった。もともと、その根拠は「逮捕者の服装が『スーロー王国軍』兵士に似ている」とか「死亡した武装者からMNLFの身分証が見つかった」という曖昧なものであり、信憑性はかなり疑わしい。

MNLFは、一九七〇年代にはフィリピンで勢力が強かったムスリムの反政府運動の担い手だったが、サバ州では、一九九〇年代までには、ふだん仕事がない地元の若者たちが所属する集まりのような存在になっていた。<sup>\*20</sup>その役割は、住民の間で揉め事が起こると（時には腕力を使って）仲裁・解決するというものだった。当時、「もしミンダナオがフィリピン政府と独立戦争を始めたら参戦するつもりか」と尋ねると「自分はマレーシア人だからフィリピンの話は関係ない」と答えた人も多く、MNLFの身分証を持つていたからフィリピンの反政府運動と繋がっているという主張に説得力はない。ただし、サバの事情をよく知らない半島出身者はMNLFが反政府の武装勢力であるという説明を鵜呑みにするかもしれない。

事件の関係者をMNLFと結び付ける情報が流れた背景には、マレーシア国民に対して、そしてフィリピンの政府と国民に対して、さらに国際社会に対して、「スーロー王国軍」に対する軍事作戦を展開する承認を取り付ける必要があり、そのためサバではほとんど実態がなくなっていたMNLFを持ち出し、さらにそれを「イスラム武装集団」と語ったのだろう。

また、「スーロー王国軍」を非人道的・非文明的な集団であると見せる試みも見られた。「スーロー王国軍」がタンドウオ村を占拠した当初、マレーシア警察は英語とスルク語で書かれたビラを撒いて投降を呼びかけたという。スーロー諸島ではフィリピン領でありながらマレー語が通じる場所が多いが、マレーシアにおいて民族間の共通語であるマレー語を用いずに英語とスルク語だけで書かれたビラを撒いたということは、マレーシア国民に「スーロー王国軍」が「話の通じない」人々というイメージを与えるのを助けることになる。「スーロー王国軍」側に投降を呼びかけるよう電話で話をしたという報道でも、「スルク語で話をした」という情報が添えられた。

また、三月一日の銃撃戦でマレーシアの警官二人が死亡した事件の報道では、「スーロー王国軍」のメンバーが白旗を掲げたため、投降するのかと思っただけで警官二人が近づいたところ、突然発砲されて二人が死亡したと発表された。

自分と意見が違う相手であっても決められたルールは守るという文化が深く根付いているマレーシアの人にとつて、白旗を掲げたので投降かと思つて近づいたら撃ち殺されたというのは想像を絶する状態である。「スルル王国軍」側はマレーシア警察が先に発砲したと主張しており、真相はわからないが、少なくともマレーシア国内での報道が「スルル王国軍」が非人道的であるという印象をマレーシア国民に与え、軍事作戦の展開への支持を取り付けるのに役立つことは確かである。<sup>\*21</sup>

また、フィリピン政府・国民や国際社会の支持を取り付けるため、マレーシア政府は「スルル王国軍」をテロリストと見なそうとした。それを支持する情報として、「イスラム武装組織」MNLFの身分証を持つていたことに加え、銃撃戦の際に「スルル王国軍」メンバーが死亡したマレーシア人警官の体の一部を切り取つたように見える映像が流されたこともあつた。この映像は後に今回の事件とは無関係のものと判明したが、マレーシア国民の多くに「スルル王国軍」が非人道的・非文明的であるとのイメージを与えるには十分だつた。また、マレーシア警察が「スルル王国軍」の非人道性・非文明性を強調したのに対し、非文明性が神秘性を醸し出すため、「スルル王国軍」側もそれを敢えて否定せず、その結果、実態よりも大きく誇張された「スルル王国軍」の姿が立ち現れた側面

もあつた。

主にマレーシア警察によるこれらの情報は、テロリスト扱いしようとするのが結果として実態以上に相手を大きく見せてしまうが、住民が噂という形で発する情報もそれと同じ働きをすることがある。三月二日のセンボルナでの銃撃戦の始まりは、住民から「タンドウオ村から『スルル王国軍』が逃げてきた」との通報があつたためだつた。タワウでも車上荒らしが「スルル王国軍」の仕業ではないかという通報があつた。これらは、今回の事件の発生以前から地域社会にあつた課題の解決のため、住民が「スルル王国軍」を口実にして警察に捜査を求めたということである。その背景には、普段は軽微な犯罪について警察に通報しても十分に対応してくれないが、このタイミングで「スルル王国軍」と言えば捜査してくれるという考え方があつたと思われる。

## VI 共産主義ゲリラから外国人へ

この事件に対するマレーシア政府の対応の背景の一つには、マレーシアの国家的な「敵」の認識の変化があるように思われる。事件から約半年を迎えた二〇一三年九月一六日、ナジブ・ラザク首相はマレーシア結成五〇周年記念式

典に参加するためサバ州コタキナバルを訪れた。夕方からの式典の準備が進められている最中、マラヤ共産党の最高指導者チン・ベン（陳平、Chin Peng）が滞在先のバンコクで死亡したというニュースが入り、ナジブ首相は記念式典の直前にテレビを通じて国民にメッセージを発表した。マラヤ共産党はマレーシアで長く公式に国家の敵とされてきたが、数年前、マラヤ共産党による反英武装闘争は結果としてイギリスによるマラヤへの独立付与を早めたとして、マラヤ共産党およびそのシンパを再評価する議論がマレーシアで起こり、マラヤ共産党から国家を守るために命を落とした警官や軍人の遺族から激しく批判される出来事があった。ナジブ首相はテレビを通じて国民へのメッセージのなかで、国家に対する深刻な脅威だったマラヤ共産党と対峙するためにマレーシアの国軍・警察や市民が大きな犠牲を強いられたことを改めて確認し、その最高指導者であるチン・ベンの葬儀をマレーシア国内で行ったり遺体をマレーシア国内に搬送して埋葬したりする可能性を完全に否定した。その上で、いまやマレーシアは共産主義という脅威はなくなったが、それにかわる新しい脅威に直面しており、国軍・警察や市民は団結してその脅威に立ち向かう必要があると呼びかけた。脅威の具体的な内容は語られなかったが、ラハダトゥで発生した「スルー王国軍」兵士の侵入事件を念頭に置き、外国からの侵入を指しているこ

とは明らかだった。

半島部マレーシア北部のタイとの国境地帯のジャングルで主に共産主義ゲリラ対策にあたった部隊がアブラヤシ農園が広がるボルネオ島東海岸のフィリピンとの国境地帯で作戦に従事していることは、地理的にも「敵」のイデオロギーの上でも状況が大きく異なっているが、国境地帯で外敵の侵入を防ぐという点は共通している。また、サバの国境問題を考える上では、東海岸ラハダトゥから目と鼻の先に位置するスルー諸島が属するフィリピンとの国境問題だけでなく、サバ州の北部に位置する南沙諸島（スプラトリー諸島）をめぐる紛争も重要な国境問題である。マラヤ共産党の背後に共産中国がイメージされていたのに対し、サバ州の国境警備の背後にも、膨張する中国に対する警戒が見え隠れする。

## むすびにかえて

人の出入りが激しいという意味で社会的流動性が高い島嶼部東南アジアにおいて、国境問題がどのような形で表れ、どのような意味を持つのか。島嶼部東南アジアの多くの地域では、住民はまばらに住んでおり、国境地帯は文化的に多様な人々が混在して密集する地域というわけではな

い。近代になって国境が引かれることで、国境の両側で社会制度や経済状況が異なり、そのため国境を越えて人が移動し、その結果、国境のどちらか側に混成社会が形成される。人々は国境ができる前から移動していたが、その多くは少数が比較的短期間に「行って戻る」訪問だった。これを国境のために生じる移動が多数で生活拠点を移すことを含めたものであることと同列に扱うことはできない。

ただし、領域国家の形成によって国境が引かれ、国境の内側でそれぞれ均質な社会制度の構築が目指されても、実際に国境の内側で均質な社会制度が出現するとは限らない。とりわけ首都から離れた国境付近では、その国民であつても、領域国家の中央政府による管理や保護が十分に行き届かない場合も少なくない。そこに国境を越えて訪れ定住する人々は、居留先国からも出身国からも管理や保護の対象とされないことになる。

国家内の周縁部では、その地域の人々にとっては死活問題で一刻も早い解決が求められるが、それを解決しうる権限や資源を持つ中央政府にとっては優先順位が低く、そのため長い間にわたって放置され問題が解決されないことがある。そのような課題に人々の目を向けさせる上で有効と思われる方法の一つに、国際社会の関心を集めることがある。それぞれの課題は現場の事情に応じて存在するが、それを「国境・領土紛争」や「災害」「テロリズム」のよう

なグローバル・イシューとして語ることにより、国際社会の関心を集め、その結果として中央政府による対応を引き出す可能性が出てくる。また、いったんグローバル・イシューとして語られ、中央政府や国際社会による対応が行われると、そこにもともと存在していた課題とは異なる別の課題への対応も入り込むことになる。

「スルー王国軍」兵士のサバ州東海岸への侵入事件も、それが「国境・領土紛争」として語られ、国際社会の関心を集めてマレーシア政府の対応を引き出す過程で、さまざまな立場の人々に利用されることになった。

サバの多くの人々にとっては、長年の課題だった国境警備と外国人問題に連邦政府が本格的に取り組むことになり、地元住民も外国人も含め、身の危険を感じずに暮らせると思えるようになった。マレーシアの連邦政府も、サバ州の有権者の支持を得て政権を維持するとともに、国境警備を増強し、周辺国との国境紛争に備える方向で対応できたことになる。

ただし、一般の人々の生活に悪い影響が出る懸念される。とりわけ「スルー王国軍」と民族的に同じスルク人らは、サバ社会において厳しい立場に置かれることが想像される。サバ州全体で約三万人いると言われるスルク人の文化団体は、侵入事件の直後、自分たちは「スルー王国軍」とは無関係であり、スルーのスルタ

ンによるサバ領有権の主張を認めないという声明を発表した。もつとも、役人や議員のように、本来ならこれらの団体の活動に積極的に参加して地域社会におけるスルツク人の生活環境の改善に取り組むべきスルツク人の多くは、自分がスルツク人であることを隠そうとする傾向があるためにこれらの団体の活動に積極的に参加せず、そのためスルツク人の生活環境が向上しにくいという問題があるという。

フィリピン側を見ると、最も大きな犠牲を払ったスルー諸島出身者は、ミンダナオ和平の過程への積極的な関与が実現しておらず、ミンダナオ和平が実現しても周縁化されたままとなる可能性が残されている。また、間接的な当事者として、今回の事件を契機に、サバ州に住むフィリピン系住民は厳しい生活を余儀なくされるかもしれない。「スルー王国軍」との関係を疑われて職を失ったフィリピン系住民が増えていると報じられているが、サバ州に移住して長い間、フィリピンには家も職もないし、それでもフィリピン側に戻ったとしても大量の「帰郷者」を受け入れることになった社会が混乱し、さらなる問題を生むことになる。サバ州に長期滞在するフィリピン系住民は数が多い、その保護のためにサバ州はサバにフィリピンの領事館を置くことを求めているが、フィリピンはサバ領有権を唱えているために領事館を置くことができず、そのためフィリピン系住民が不都合を被っている状況は改善されて

いない。

アジア系でありながら特定の国をイメージさせないために「スルー」と名付けたのが『スター・トレック』制作者の意図だったが、観客が親しみを湧くように特定の国と結び付けられ、「スルー」という名前は舞台裏に退いた。今日のグローバル社会に生きる私たちは、私たち自身が日々の暮らしを営むのと同時に、報道・研究や他の情報源を通じて互いの様子に目を向けあう存在でもある。グローバル社会に暮らす他の人々にどのような関心の目を向けるかは、その人々が自分たちの抱える課題をどのような形で世界に訴えるかという選択と密接に関わっている。人は、グローバル社会の関心を集めるため、自らが抱える課題をグローバル・イシューに引き付けて語ろうとする。グローバル・イシューを捉える上では、その裏にどのような地域の事情があり、それがどのように解決されるかという観点から見るとも大切である。

### ●注

\*1 一九九〇年代頃まで、日本人へのサバ州紹介では「北海道ぐらいの広さの土地に札幌市ぐらいの人口が住んでいるところ」と言われていた。最近ではサバ州の人口は大幅に増えており、本稿で述べるようにこの人口増加は今回の事件と密接な関わりがある。

\*2 「スルー王国軍」兵士侵入事件の経緯および報道内容



については、マレーシアで刊行されている日刊紙各紙（全国紙およびサバ州の地元紙）および二〇一三年五月に筆者がサバ州コタキナバルでサバ州政府関係者に行った聞き取り調査や個人的な通信をもとにしている。

\* 3 当初はこの銃撃戦で市民一人も巻き添えになって死亡したという情報もあったが、この事件に関する公式情報や一般報道では言及されていない。

\* 4 独立以前のサバの歴史は（Tregonning 1965 [1967]; Ranjit 2000）を参照。

\* 5 当時、この土地は「北ボルネオ」（North Borneo）と呼ばれ、一九六三年にイギリスから独立してマレーシアの一州になったときに「サバ」（Sabah）に改称した。そのため一九六三年までは「北ボルネオ」と呼ぶべきだが、便宜上、本稿では一九六三年以前も「サバ」と呼ぶ。

\* 6 北ボルネオ会社がブルネイの سلطان から川ごとに統治権を買って領土を拡大した様子は（Black 1983）に詳しい。

\* 7 フィリピンのサバ領有権主張についてマレーシア側から書かれた研究として（Mohd. Arif 1988）がある。

\* 8 一九五〇年代のサバの独立構想については（山本二〇〇三）を参照。

\* 9 「ラジャムダ」とは皇太子の意味だが、メディアによつては「副王」と訳しているものもある。

\* 10 日本語や英語のメディアではこの事件の首謀者を「キラム三世」と書くものがあるが、正しくは「ジャマルル・キラム三世」であり、「キラム三世」は適切ではない。

\* 11 マレーシア側の報道では Azzimudin Kiram、フィリピン

側の報道では Agimuddin Kiram と書かれる。

\* 12 州によつては「スルタン」の称号を用いないところもあるが、スルタンまたはそれに相当する各州の統治者を本稿では「スルタン」と呼ぶ。

\* 13 サバ州侵攻に踏み切る前に、ジャマルル・キラム三世はフィリピン政府にスルー王国の関係者の窮状を訴える書状を送っていたが、フィリピン政府側からは反応がなく、今回の事件が起きた後でフィリピン政府が調査したところ、外務省内ではかの書類に紛れて放置されているのが発見されたといふ。

\* 14 日本語メディアや研究書によつては「人民同盟」「人民連盟」などと訳されることもある。

\* 15 マレーシアの二〇〇八年総選挙については（山本編二〇〇八）を参照。

\* 16 ステファンの経歴と背景については（山本二〇〇三）を、ステファンの木材政策については（Lee 1976）を参照。一九九四年にいたるサバ州政治については（Luping 1994）を参照。

\* 17 ジェフリーについては（山本二〇一〇）を参照。

\* 18 大使館・領事館が作られ、一人一人の外国人がパスポートを所持するようになれば犯罪は減るし争いも簡単に解決する、という発想は必ずしも現実的でない面があるが、少なくともサバの人々はこの二つの課題を解決することが重要だと考えている。この発想は、サバ社会がもともと穏やかで厳しい争いがほとんどないことをよく表している。

\* 19 インドネシアはサバ州に領事館を置いたが、パスポート



を持たずにサバに入国するインドネシア人も多い。マレーシア政府は、パスポートを持たない外国人をいったん出国させ、パスポートを取って正規の手続きで入国するようにとっており送還作戦を展開しているが、インドネシア人の場合は、いったん帰国してもジャワ島などの出身地まで戻るのが大変だし、戻っても複数の役所をまわらなければパスポートが取れないため、結局パスポートを取らずにサバ州に戻ることが繰り返されてきた。マレーシア政府はこの問題を解決するため、マレーシアとインドネシアの国境付近にインドネシアのパスポート発給に必要な関連部署を集めた行政サービスセンターを作り、一カ所でパスポートがとれるような仕組みを作るようインドネシア政府に働きかけており、これによって問題解決に進むことが期待されている。

\*20 この段落の記述は筆者の一九九〇年代のサバ州東海岸での調査に基づく。

\*21 なお、警察による包囲と投降の呼びかけから軍事作戦に転換する上で、三月一日の銃撃戦で犠牲になった二人が半島部出身のマレー人だったことも重要な意味を持ったように思われる。もしこれがサバ州出身者だったとしても、連邦政府は同じように軍事作戦に踏み切り、それに対して国民（とくに半島部マレーシアの住民）は同じように支持を与えたのかは大いに疑問である。

\*22 マレーシアでは一九五七年の独立以前からマラヤ共産党が主要な国家の敵と目されており、一九四八年にはマラヤ全土に非常事態が宣言された。非常事態は一九六〇年に解かれたが、同年施行された国内治安法（ISA）は主に共産主義

ゲリラから国家を守ることが想定されていた。一九八九年にマレーシア政府とマラヤ共産党は和平合意を結び、マラヤ共産党が解党することにより、マレーシア政府のマラヤ共産党との戦いは正式に幕を閉じた。最高指導者のチン・ペンは生前のマレーシア帰国が認められず、また、死後も葬儀や埋葬の場所をめぐってマレーシア国内で議論になることは、今日に至ってもマラヤ共産党との戦いがマレーシアで完全に過去のものとなったわけではないことを物語っている。ただし、マレーシア政府はチン・ペンの死をもって共産主義ゲリラとの闘争における完全勝利と位置付け、世界でも国内の共産主義者に完全勝利したのはマレーシアだけであるという表現により国威発揚に用いている。

\*23 「スルー王国軍」兵士侵入事件への対応として、マレーシア政府は、サバ州東部に位置するクダット、サンダカン、ラハダトゥ、センボルナ、タワウの五つの郡を対象とする「サバ州東部治安司令部」（ESSCOM）を設立した。この対象地域には、スルー諸島からはかなり離れているがスプラトリー諸島には近い北部のクダットが含まれている。

#### ●参考文献

山本博之（二〇〇三）『脱植民地化とナシヨナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。

山本博之編（二〇〇八）『民族の政治』は終わったのか——二〇〇八年マレーシア総選挙の現地報告と分析』日本マレーシア研究会。

山本博之（二〇一〇）『流動性の高い社会における公正性の確

保——ジェフリー・キティガン著『サバに公正を』の公正観「西尾寛治・山本博之編著『マレー世界における公正／正義概念の展開』(CIAS Discussion Paper No. 10)」、四一—四七頁。

Black, Ian (1983) *A Gambling Style of Government: The Establishment of the Chartered Company's Rule in Sabah, 1878-1915*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Lee, Edwin (1976) *The Troubays of Sabah: Chinese Leadership and Indigenous Challenge in the Last Phase of British Rule*. Singapore: Singapore University Press.

Luping, Herman James (1994) *Sabah's Dilemma: The Political History of Sabah (1960-1994)*. Kuala Lumpur: Magnum Books.

Mohd. Arif bin Dato Hj. Ohman (1988) *Tuntutan Filipina terhadap Sabah: Implikasi dari segi Sejarah, Undang-Undang dan Politik*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Ranjit Singh, D.S. (2000) *The Making of Sabah, 1865-1941: The Dynamics of Indigenous Society*. Kuala Lumpur: Universiti Malaya Press.

Tregonning, K. G. (1965 [1967]). *A History of Modern Sabah (North Borneo, 1881-1963)*. Kuala Lumpur: Universiti Malaya Press.

#### ●著者紹介●

①氏名……山本博之(やまもと・ひろゆき)。

②所属・職名……京都大学地域研究統合情報センター・准教授。

③生年・出身地……一九六六年、千葉県。

④専門分野・地域……マレーシア地域研究、災害対応と情報。

⑤学歴……東京大学教養学部、東京大学大学院総合文化研究科・修士課程(地域文化研究専攻)、東京大学大学院総合文化研究科・博士課程(地域文化研究専攻)。

⑥職歴……マレーシア・サバ大学講師(三一歳、任期二年)、東京大学教養学部助手(三四歳、任期二年)、在メタン総領事館

委嘱調査員(三六歳、任期一年)、国立民族学博物館地域研究

企画交流センター助教授(三八歳、一年半)。

⑦現地滞在経験……マレーシア(交換留学生、一七歳、一年間)、

中国(語学留学、二〇歳、一年間)、マレーシア(研究所客員

研究員・大学講師、二九歳、六年間)、インドネシア(総領事

館委嘱調査員、三六歳、一年間)。

⑧研究方法……現地感覚を養うには現地経験が不可欠。条件が

許せば、調査者としてはなく社会の一員として現地に滞在

して生活することが望ましい。逃げ道がない状態に自分を置

くことで、その社会の形が見えてくる。

⑨所属学会……日本マレーシア学会、東南アジア学会、アジア

政経学会、日本災害復興学会。

⑩研究上の画期……二〇一三年のマレーシア総選挙。サバ州で

は五〇年前のマレーシア結成時の文書が争点になり、歴史研

究が今日の政治に直接関係していることを実感した。

⑪推薦図書……シルズ『社会学的想像力』(新装版、鈴木広訳、

紀伊國屋書店、一九九五年)。研究者と研究対象が地続きの

世界に生きている今日の私たちは、本書の考え方を発展させ

た「地域研究的想像力」を養う必要がある。